

今年は大阪・関西万博が開催されました。世界の文化や技術に触れることで、こどもたちが興味・関心を高め、SDGs について考えたり様々な体験を味わったりしたことでしょう。豊かな体験が今後の成長につながってほしいと思います。今号は、第1回幼稚園教諭・保育士合同研修会と保幼小連携合同研修会の様子をお知らせします。

第1回 幼稚園教諭・保育士合同研修会 【6月17日(火)170名参加 池上会館】

テーマ 【特別支援教育】 「配慮が必要なこどものいる家庭の保護者支援」

渋谷区子ども発達相談センター チーフアドバイザー 公認心理師 市川 奈緒子 先生

保護者支援が上手く行かない時、実はスタートが間違っているのでは？この親はこどもの問題が分かっていないから「正しいこどもの姿を伝えて理解させないといけない」障害への対応は正しい診断から始まる。

⇒本当にそうなのだろうか？でもこれではうまくいかない。ここを見直してみよう（保育観、ご自身を見直す）

＜発達の子になる親にどう支援するか：保護者を理解したいという姿勢が大事＞

＜面談は保育者と保護者が相互に理解し合うことが大切＞保護者に分かってもらえないと思っている⇔保護者も保育者に分かってもらえないと感じているかもしれない。 ※自分が相手を分かるよう努力すること。

＜障害のあるこども・発達の子になるこどもの親を取り巻く社会の現状＞

- ・こどもの「問題」はすぐに親のせいになれる。「言葉かけを多くする」「スキンシップを増やす」の弊害。
- ・「沢山話しかけてあげましょう」→「あなたは話しかけていない」と言っているのと同じ。
- ・「スキンシップをとる」→触覚防衛が強い子は嫌がり、どんどん逃げていく。助言にも何にもならない。

＜障害が「特別なこと」である社会：自分ごとではない、他人ごと、障害というレッテルをはる差別＞

- ・保育園・幼稚園の中で「この子は障害児かどうか」と考えて（見分けようとして）いませんか？→何に困っているのか知ること、一人一人は違って当然で、障害児かどうかは保育に関係ない。

＜障害のあるこども・発達の子になるこどもの親を支援する：保護者・家族を理解することが絶対に必要＞

- ・日常生活上の困難～偏食、多動、寝ない、抱っこは逃げていく等→こどもの行動の理由や気持ちが分からない。（親なのに分かってあげられない）拘りの強さ、パニック→そのたびごとに多大な労力と心理的負担がかかる。どれだけしんどい育児だったかを考える。このこどもの24時間、365日をイメージする。この子と生きてきた（育ててきた）これからこの子と生きていく親の人生をイメージする

《こども支援が最大の保護者支援である⇒ここにエネルギーを、先生方の専門性を活かす》

保育園・幼稚園の中でこどもを支えていくことこそが最も大きな親への支援となる→こどもの成長に希望がもてること、こどもが認められ大事にされることは、そのまま親自身が大事にされ認められることにつながる。こどもが変わることで親が変わる、親が変わらなくてもこどもは変わる。 ※こども理解をしっかりと行い、園全体で支える。

《親の味方になる（こどもの良き理解者だと認識してもらうこと）⇒こどもにとって大好きな先生になる》

- ・親にこどものことを教えてもらう
- ・親に味方でありたいと伝え続ける

親に味方だと思ってもらえると、言葉の裏の思いを話してもらえる

《他機関との連携》

専門機関を紹介する時はプラス思考で伝える
ここに行けばどのようなことをしてもらえるか
こどもはどう伸びるのかを話す（要信頼関係）

その為には

どんなことをしているか、どんな人がいるのか、
専門機関を知ること、一番怖がっている親自身の不安を取り除いてあげられるのかを考える

連携で大事なこと

つながってからが本番～保育に生かす

終わりに

- ・他機関同士の違いを大切に
- ・顔の見える連携
- ・できている所、上手く行った点を共有する

- ・「児童発達支援計画」を見せてもらう
- ・「保育所等訪問支援」事業を活用する等

- ・自分を変えることはできる
- ・保育を変えることはできる
- ・療育機関ではできない支援者になる